

國學院大學學術情報リポジトリ

国学者藤井高尚の著作に見られる送り仮名表記

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神作, 晋一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000921

国学者藤井高尚の著作に見られる送り仮名表記

神作 晋一

一 はじめに

日本語史の近世期、文字表記研究については仮名遣いや仮名文字遣が多く行われているが、同じ表記でも送り仮名を取り上げたものはあまり多くない。

これまで筆者は、神作晋一（二〇〇一、二〇〇三、二〇〇五、二〇一四a、二〇一四b等）で、本居宣長など近世の国学者の送り仮名の実態を調査してきたが、その後の時代の国学者等の状況はまだ論じられていない。明治時代以降の国語政策を論ずるにも、江戸中期以降の動向をpushさえておくことに意義がある。

藤井高尚（一七六四「明和元」～一八四〇「享保11」）

はいわゆる鈴屋門下で宣長の門弟の国学者である。『伊勢物語新釈』『消息文例』などが知られているが、その他の多くの著作を残している。

本研究では藤井高尚の著作『三のしるべ』（一八二六「文政12」年）、『松の落葉』（一八二六「文政12」年）の送り仮名を取り上げて傾向を分析・考察し、宣長以降の国学者の送り仮名の実態を探っていくことを目的とするものである。

二 先行研究

近世の送り仮名や語表記については、早くから池上禎三

(一九五五、一九五七、一九八二)の指摘がある。池上氏は江戸後期滑稽本の実態にふれ、「漢字一字につき二音節の基準」ということを述べている。

実態の調査としては、原口裕(一九八九)の室町時代後半から現代までをたどる詳細な調査があり、近世では『好色一代男』(二六八二「天和2」年刊)、『雨月物語』(一七七六「安永5」年刊)、『南総里見八犬伝』(一八四四「天保11」年刊)の三作について、活用語の音節数と振り仮名の関係から送り仮名の分析を試みている。原口氏はその中で、

二音節動詞は振り仮名が二音節のため送り仮名は振り仮名による表記になる。

三音節動詞、四音節動詞の活用語尾は送り仮名で示すが、四音節動詞の場合振り仮名が三音節になるため、時折三音節動詞の活用語尾が振り仮名になることもある。

『南総里見八犬伝』では二音節動詞の送り仮名表記が増えている。

という指摘をされている。

送り仮名と音節数については菊地圭介(二〇〇〇a)が定家本の動詞表記、菊地圭介(二〇〇〇b)では石川雅望(二七五四〜一八三〇、狂歌師、国学者、戯作者)の「おくりがな法」、佐藤麻衣子(二〇一〇、二〇一一)は享保期の浄瑠璃本の捨て仮名、送り仮名について論じている。

神作晋一(二〇〇一)では宣長がもっとも活発に出版活動を行っていた寛政年間の著作(『菅笠日記』『玉あられ』『宇比山踏』)、神作晋一(二〇一四a)では『玉勝間』、また神作晋一(二〇〇五)では、口語文(『古今集遠鏡』)などの論考を記したことがあるが、三音節動詞にほとんどゆれが見られないことなどから、それまでの慣用を考慮しながらも、読みやすさへの配慮のために、かなり意識的に統一されていたということを見出した。

以下、こうした動詞の音節数との関わりなどを中心に、宣長以降の状況として藤井高尚の著作の調査・分析・考察を行う。

三 資料・調査手順について

三―一 調査対象について

藤井高尚『三のしるべ』(国学の概論三卷)^①『松の落葉』(随筆四卷)^②を取り上げる。なおこの二作の出版にいたる経過は、工藤進思郎(一九八二)等に記されている。実際には版下を施したのは薮蘭牛^③であるが、執筆・校合などは高尙本人のものである。

三―二 使用テキストについて

テキストは『三のしるべ』(略称『三』)が和泉書院影印叢書67のもの、『松の落葉』(略称『松』)が大阪心齋橋通書肆河内谷儀助の版本を使用し、それぞれ『日本随筆大成』(吉川弘文館)の本文(『三』第一期22巻、『松』第二期22巻)を参照した。

三―三 用例の扱いについて

用例については、動詞(補助動詞を含む)・形容詞を取り上げる。動詞・形容詞については送り仮名の対象として

どの先行研究においても見解が一致している。なお二作とも文語文法で漢字仮名交じり文によって書かれているが、漢文や漢文体の部分(引用など)は除いた。

語の認定は、小学館『日本国語大辞典第二版』などを参照して、(一部を除き)複合語と見られるものも、できる限り細かく分けた。^⑤

動詞・形容詞は表記形態によって次のように分類できる。

(1) 漢字書きのもの

例「立かへり」、「同じくて」

(2) 漢字書きで小文字の語尾を付けたもの

例「有りぬべし」、「同シ宮」

(3) 漢字書きで振り仮名を付けたもの

例「越て」、「浅けれど」

(4) 仮名書きで右側に振り漢字を施しているもの

例「まつ程」、「たかき人」

(5) 仮名書きのもの

例「ゆきて」、「おほし」

(6) 「心…」のように語の一部が漢字のもの

例「心うさよ」「心むし」

このうち(1)(2)(3)のものを今回の調査対象とする。文語文法の活用体系と歴史的仮名遣いにより原形(終止形)を五十音順で示し、あとは次の方針による。

1 動詞

○音節数(文字数)・活用形式^⑥

一音節動詞(Aカ変・Bサ変・G下二段)

二音節動詞(C上一段動詞、D下一段動詞、Eナ

変、F四段活用、G下二段、H上二段)

三音節動詞(F四段活用、G下二段、H上二段)

四音節以上の動詞(F四段活用、G下二段、H上二

段)

○活用形(接続)

未然形／連用形・転成名詞(名詞としての用法)、

連用中止・接続助詞「て」、助詞・助動詞(「て」以

外)、複合語の前半部、連用修飾などの上記以外の

連用形／終止形・そのまま終止するもの、助動詞接

続(と・べし・らむ・めり・まし等)／連体形／已

然形／命令形

2 形容詞

ク活用、シク活用

活用形(未然、連用、終止、連体、已然、命令さらにカリ活用の別)、その他は動詞の場合に準ずる。

四 調査結果・分析・考察

四―一 動詞(表1・2)

表1は音節数別に表記を分類したものである。異なり、延べ(総数)とも四段動詞の例が多い。表記では漢字表記が一番多く、振り仮名付きが『三のしるべ』で15.8%(479例中76例)ほどある。小文字を付けたものはわずかに1例(成り出^ナ坐^マすところ)であった。

また、表2は音節数別に活用語尾表記の有無について分類したものである。音節では2と3が語尾表記の境目と仮定されるが、「見ゆ」などの特殊事例やその他の例外もある。

表1 音節数・表記形式別

音節数	活用形式	三つのしるべ					松の落葉					二作計
		異なり	総数	漢字	振仮名	小文字	異なり	計	漢字	振仮名	小文字	
1	A力変	1	15	11	4		1	27	27			42
	Bサ変	1	2	1	2		1	2	2			4
	G下二段	2	2	1	1		1	1	1			3
2	C上一段	3	107	107			3	179	179			286
	D下一段											
	Eナ変	1	4	2	2		1	9	9			13
	F四段	18	33	17	13	1	20	43	43			76
	G下二段	8	73	69	5		7	352	352			425
3	H上二段	2	2	2			3	19	19			21
	F四段	24	120	94	26		25	160	159	1		280
	G下二段	9	94	82	12		10	23	23			117
4	H上二段	1	2	2			1	15	15			17
	F四段	4	13	4	9		7	10	10			23
5	G下二段	2	7	5	2		3	36	36			43
	F四段	1	6	6			3	7	7			13

四 — 一 — 一 一音節動詞
 A力変(来)、Bサ
 変(為)、G下二段
 (得、心得)

四 — 一 — 二 二音節動詞
 C上一段動詞(似
 る、見る、居る)
 D下一段動詞(蹴
 る)は用例がなかつ
 た。

↓ここまでは、語幹と活
 用語尾が一致するなど構
 造上送り仮名のゆれ等が
 問題とならないので記述
 は省略する。

F 四段動詞
 ※以下、傍線部は

表2 活用語尾表記の有無

音節数	活用語尾 表記 ↓表記	三つのしるべ					松の落葉					総計		
		0	1 無	2 不足	3 有	4 語幹	計	0	1 無	2 不足	3 有		4 語幹	計
1	1漢字	12				1	13	28			2		30	43
	2振仮名	7					7						7	
	3小文字			1※1	1※2					1※1	1※2		0	
2	1漢字	107	42	3	45	197	190	79	5	328		602	799	
	2振仮名		9		11	20							20	
	3小文字				1	1							1	
3	1漢字		56		122	178		31	4	163		198	376	
	2振仮名		4		34	38				1		1	39	
	3小文字												0	
4	1漢字		1		7	9		10	13	23		46	55	
	2振仮名		1		10	11							11	
	3小文字									7		7	0	
5	1漢字				6	6							13	
	総計	126	114	3	236	480	218	120	22	524		884	1364	

活用語尾表記「0」問題対象外「1無」なし、「2不足」一部不足「3有」あり「4語幹」語幹部分を表記

※1 二段動詞の連体形「…る」だけ表記(『三』2例、『松』5例)

※2 「見ゆ」(『三』46例、『松』312例)

二作品ともに存在する語

云ふ、入る、置く、負ふ、請ふ、知る、住む、立つ、
繼ぐ、富む、生ず、成る、吹く、坐す、持つ、行く

〔三三〕

云ふ、打つ、織る、買ふ、請ふ、咲く、知る、住む、
問ふ、鳴く、縫ふ、吹く、舞ふ、召す、持つ、焼く、
行く、読む、折る、〔松〕

これらは活用語尾が送られないものがほとんどであり、
振り仮名が付された場合、活用語尾は振り仮名に含まれ
る。例外となるのは次の通り。振り仮名の付されたものが
多い。

生し、生しつ、負ひ、請はん、坐し、坐すとこ
ろ、知りたまふ、知りたまふ、知りて、知るべし。成

り出〔三三〕

云ひ、行けるほどに、織りたるあり。織りたる布なら
めど、請ふころに、折りとり、読めるは、舞ふに

〔松〕

G H 下上二段動詞

明く、出づ、消ゆ、副ふ、見ゆ、竟ふ（下二段）生
ふ、老ゆ（上二段）〔三三〕
出づ、消ゆ、裁つ、見す、見ゆ、分く、（下二段）隕
つ、生ふ、老ゆ、（上二段）〔松〕

下二段・上二段においても二音節動詞では活用語尾が表
記されていない。振り仮名も漢字部分に含まれる。例外
は、「見ゆ」を除くと、「竟へたまへる〔三三〕」、「竟へぬ
る〔三三〕」の2例である。二段活用の連体形の例は「出
るは、出るものにしあれば、出るよしを、〔三三〕」であ
り、「…」のみを送っていた。

E ナ行変格活用

死ぬ ※〔三三〕〔松〕ともに用例あり

死たる後、死たる人、死て、死ぬべき人〔三三〕

死にける家にて、死にたらん後、死にたる家の、死に
たる處の、死にたる処は、死にたる処も、死にたる
人、死につる人の、死ぬるものなし〔松〕

四―一―三 三音節動詞

F 四段動詞

証す、出す、齎く、思ふ、帰る、忌ふ、降す、降る、
好む、過す、崇る、給ふ、賜ふ、作る、遣る、昇る、
侍る、申す、禍る、祭る、祀る、守る、恵む、任す、
渡る、拜む、(『三』)
出す、至る、写す、起る、思ふ、帰る、通ふ、降す、
好む、殺す、記す、過す、給ふ、賜ふ、散す、使ふ、
作る、造る、和す、残る、登る、侍る、申す、祭る、
学ぶ、結ぶ、笑ふ、拜む、(『松』)

活用語尾が過不足なく送られ、振り仮名も語幹部分に限られ、活用形による差もなく、安定した表記形になっている。

例外は「申す」「侍る」である。

a. 「申す」系21例(『三』3、『松』18)

「申」系27例(『三』4、『松』23)

b. 「侍る」系19例(『三』5、『松』14)

「侍」系3例(『三』3、『松』0)

「申す」は送り仮名のないものが多い。「侍る」は送

り仮名を付したものが多く、いずれにしてもやはり漢文
体で使用されていることが影響していると考えられる。

G H 下上二段活用動詞

合す、婚す、生る、数ふ、堅む、聞ゆ、福ゆ、定む、
伝ふ、教ふ(下二段)用ふ(上二段)(『三』)
合す、治む、収む、仰す、聞ゆ、定む、尋ぬ、伝ふ、
止む、停む、乱る、教ふ(下二段)用ふ(上二段)
(『松』)

二段活用の場合も活用語尾が正確に送られていて、安定
した表記になっている。振り仮名を振る場合は語幹の部分
だけに限られている。例外は次のようなものであった。

a. 定て、(『三』)

b. 〈をしふ(教)〉66例

「教ふ」系16例 「教」系50例(すべて名詞形の例)

c. 二段活用の連体形

例…合るやう、治るは、用ること、は、用ることの

四―一―四 四音節以上の動詞

F 四段動詞

荒ぶる、行ふ、悲しむ、交はる、奉る、(『三』)
 誤る、荒ぶる、敬ふ、苦しむ、定まる、尊む、貫く、
 奉る、掌る、仕る、(『松』)

四音節以上の動詞の場合も、三音節動詞の場合と同じく、活用語尾が正確に送られている。振り仮名も語幹部分だけであるし、安定した表記形になっている。

行ひの、行ひも、行ふ人、行ふべき、奉らんも、奉り、(『三』)

尊みていふこと、定まれるは、『松』

G H 下上二段活用

考ふ、幸ふ(『三』)
 改む、考ふ、畜ふ(『松』)

これらも四段活用と同様、活用語尾が送られている。

ちなみに二段活用の連体形、已然形の例では、「考ふ」を例にとると

「考ふる」1例、「考る」13例(『三』) 0例『松』13例であった。最後の一文字を送ることが標準になっていたのだろう。

表3 形容詞

活用形式	表記	三のしるべ					松の落葉						
		異なり	計	無	不	有	語幹	異なり	計	無	不	有	語幹
ク活用	1漢字	17	38			38		14	75			75	
	2振仮名		17	5	2	10							
シク活用	1漢字	5	26		3	23		8	123			122	1
	2振仮名		13	2	10	1							
総計			94	7	15	72	0		198			197	1

四―二 形容詞(表3)

四―二―一 ク活用

明し、浅し、厚し、多し、清し、
 寒し、少し、高し、近し、長し、
 名高し、直し、広し、深し、短し、
 善し、(『三』)

青し、多し、清し、黒し、白し、
 高し、貴し、近し、速し、長し、
 名高し、深し、古し、丸し、
 (『松』)

清く、清くなり、近き世には、短しと

活用語尾が送られている一方で、「善神」などがある。これは語幹が一音節になっていることが影響していると考えられる。

四―二―二 シク活用

悪し、同じ、正し、楽し、久し、

貧^{まう}し、(『三』)
美^{うく}し、同^{おな}じ、正^{ただ}し、甚^{はなは}し、久^{ひま}し、貧^{まう}し、珍^{めづ}らし、雄^を
し(『松』)

同じさまに、久しくなりぬ。正しき神道、正^{ただ}しくある
べき

シク活用の場合も、おおむね活用語尾が送られている
が、例外として、

悪^{アスキ}神、悪^{アシ}かりし、悪^{アシ}き国、悪^{アシ}き事、悪^{アシ}く、正^{カウシ}く、貧^{マウシ}
きと、貧^{マウ}くても」(『三』)

などがある。振り仮名がついているものもあるが、「し」
の部分がひらがなで表記されないものが見られる。『松の
落葉』は一例(「珍らしき」)を除きすべて活用語尾が過不
足なく表記されていた。『三のしるべ』では一部振り仮名
に含まれているものと、活用語尾表記がないか不足してい
るものがあつた。

5 まとめ

以上、これまで考察してきたことをまとめてみる。

1. 三音節以上の動詞は活用語尾が送られるが、二音節
以下の動詞は活用語尾が基本的には漢字部分に含ま
れるものの、例外となる二音節動詞の活用語尾表記
が増えている。

2. 1の原則で不都合が生じる場合、「よみ」を示すの
は振り仮名となる。

3. 形容詞は、原則的に活用語尾に過不足なく安定した
表記であるが、シク活用などで不十分な表記が目立
つ。

今回の藤井高尚の調査では、基本的には宣長のものと同
じ傾向を示しているものの、一部の語で二音節動詞でも一
律に活用語尾を送っているところも見られた。読み誤りそ
うなところは一律に振り仮名を駆使している部分もあつ
た。

主要参考文献

池上禎三(一九五五)「明治以来の正書法」『言語生活』46 22

—23頁

池上禎三(一九五七)「国語表記法の諸問題」『続日本文法講座

2『明治書院』 25頁

池上禎三(一九八二)「表記の歴史から見た現代語」『講座日本語学2』明治書院 8頁

神作晋一(二〇〇二)「本居宣長の送り仮名意識——漢字と仮名の関係——」『国語文字史の研究6』和泉書院

神作晋一(二〇〇三)「上田秋成の送り仮名——富岡本『春雨物語』を対象として——」『千葉大学日本文化論叢』4 二〇〇三年三月

神作晋一(二〇〇五)『古今集遠鏡』の送り仮名——口語表記の与えた影響——『國學院雜誌』一〇六—五 二〇〇五年五月

神作晋一(二〇一四a)「本居宣長『玉勝間』の送り仮名」『台湾日本語文學』35 二〇一四年六月 325—349頁

神作晋一(二〇一四b)「尾崎雅嘉『古今和歌集鄙言』の送り仮名」『南台人文社会學報』12 二〇一四年十一月 141—165頁

菊地圭介(一九九六)「おくりがな」「すてがな」の語史」『語文(日本大学)』94 一九九六年三月

菊地圭介(二〇〇〇a)「藤原定家自筆かな文献における動詞表記について——いわゆる「おくりがな」を漢字とかなの使

用法の中に位置付けて考える——」小久保崇明編『国語国文学論考』笠間書院

菊地圭介(二〇〇〇b)「石川雅望の「おくりがな法」について」『解釈』46—5・6 二〇〇〇年六月

久保田篤(一九九九)「黄表紙の片仮名」『国語と国文学』76—5 一九九九年五月特集号

工藤進思郎(一九八二)「藤井高尚『松の落葉』の刊行と著述祝——中村寛宛書簡による考察を中心として」『岡山大学文学部紀要』3

坂口至(一九八七)「近世初期の送り仮名——和泉流古狂言『和泉家古本』の場合——」『国語国文研究(熊本大学)』25 13頁

佐藤麻衣子(二〇一〇)「享保期浄瑠璃本における捨て仮名——『出世握虎稚物語』の調査から」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』16 59—71頁

佐藤麻衣子(二〇一二)「送り仮名の軌範と問題点——享保期浄瑠璃本『出世握虎稚物語』の調査から」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』17 29—40頁

原口裕(一九八九)「近代の送り仮名」『漢字講座4 漢字と仮名』武蔵野書院

注

- (1) 「道のしるべ」(古道論)、「歌のしるべ」(歌論)、「文のしるべ」(文章論)の3巻からなる。
- (2) 神祇・和歌・有職・語学や一般風俗などに及ぶ随筆集。
- (3) 画家。名は徳風、字は子堰、通称仙三、大坂の人。蔀閨月の男で立売堀一丁目に住居、画法を父に授かり、『摂津大坂全図』で知られた。他に『古状摘具註抄』『庭訓往来具註抄』『女諸礼綾錦』など。天保一四(一八四三)没、行年不詳。(三善貞司『大阪人物辞典』清文堂出版 二〇〇〇年)
- (4) 愛媛県大洲市立図書館蔵本(国文学資料館のデータベースを通じて閲覧)
- (5) (たとえば「寫し誤れる」とある場合、「寫す」と「誤る」に分けて、それぞれの活用語尾と下接語を考えるものとする。)
- (6) ラ変については、考察の都合上、四段動詞とともに考察する。
- (7) 「心得」「出来」は正確には一音節動詞ではないが、活用はそれぞれ「得」「来」と同じなので一音節動詞へ分類

した。